〈最終講義〉

教育学研究の〈裏〉舞台

――顔の見えない友人たちへ――

谷　川　彰　英

〈最終講義〉

教育学研究の〈裏〉舞台

——顔の見えない友人たちへ——

谷 川 彰 英

本日どんなお話をしようかと，私はずっといままでの先輩方の講演のテーマを見て考えてきました。なかにはいまご自身が最先端で取り組んでおられる研究を発表される先生もいましたが，私のように能力のない人間は，昔のことを語るのが一番良いのではないかと考えました。

昔のことを語ることの一つの理由は，いろいろなことを私自身がこの何十年やってきたわけですが，どうもそれが一貫して皆さんに伝わっていないということがあります。なぜあの人は地名の研究をしたのだろうとか，なぜマンガなどに走ったのだろうとか，たぶんそういう思いを抱いている方がたくさんいらっしゃると思われるので，やはり今日は，遺言のつもりで，その裏話をお話したいと思います。

最初は演題を「教育学研究の舞台裏」としようと思ったのですが，舞台裏ではあまりに惨めな感じがしましたので，〈表舞台〉と〈裏舞台〉がもしあったとするならば，私の数十年間の研究のなかで，いったいそれらがどういうふうに変化してきたのかということを，今日はお話したいと思います。

1．教育学研究の〈表〉舞台と〈裏〉舞台

私の略歴を見ていただきますと，1974年に助手となり，今年で退職ということなのですが，簡単に言うと，前半は表だったと思うんです。表舞台を歩いてきたなという感じがいたします。後半は裏舞台を歩いているという感じがありまして，その境がどこかと言うと，1996年に博士論文を書いた時です。それまで私は表舞台だったのですが，それ以降は，ずるずると裏舞台へ後退していったんです。では，いったいそれはどういうことなのだろうということを，お話してみたいと思っているわけです。

最近ある学会で「教科教育学の宿命」という提案をしました。これは，教育学研究のなかで，とくに教科教育というのは，少し違う位置にあるということです。一般の教育学と教科教育学とは違う。どこが違うのかというと，教科教育の場合はどうしても「内容」が伴ってくるということです。これに対して，一般の教育学の場合は，例えば学校教育のいろいろな教科について研究されていても，そこで歴史とか地理とか，あるいは数学とか，そういう知識をすぐさま要求されるわけではないですよね。一方で教科教育の場合，社会科の場合もそうですが，どうしても歴史学とか地理学とか経済学とか，そういうことについても実は勉強しないと出来ないということが，いわゆる強いジレンマでした。

私は当初千葉大に勤務していましたが，所属としては社会科の教室に入っていました。そこには教育学の分野の人は誰もいなくて，地理学の先生とか歴史学の先生とか，経済学の先生とか法律学の先生とか，そういう専門の先生方と一緒の教室に入るわけです。そうすると，やはりそこでただ教育学の話をしているだけではおさまらないものがあるということです。しかも，筑波大に戻ってきての所属はやはり教科教育の分野で，しかも教育研究科という，いわゆる高等学校レベルでの教員養成を行なっているところでしたので，そうすると教育方法だけでは済まないということがありました。このように，教科教育の場合は，社会科に限らず，どこも同

筑波大学　特任教授（名誉教授）

じようなジレンマを抱えています。

ここで，千葉大時代のことについてお話しましょう。『文明と伝統の授業』というのは，実は私のまとまった本では最初の本で，1977年の著作です。あとで詳しくお話しますが，この本が実は柳田国男研究の契機になりました。

この本は「社会科の新展開」というテーマのもとに３人が３つのテーマで本をまとめようとするものでした。３つのテーマとは「人間と環境の授業」「日本と世界の授業」「文明と伝統の授業」の３つでした。それを当時文部省の視学官をされていた小林信郎先生と，調査官をされていた溝上泰先生，そして私で分担することになったわけです。その３つのテーマのなかでは「文明と伝統の授業」が一番私にはふさわしいと考え，その本の編集に取り組むことになりました。どうも，この３巻本の編集に私を引き込んだのは，将来私を調査官にしようという動きもあったかに聞いています。

ちょうど77年ですから，昭和52年の学習指導要領ができる直前でした。そのとき私の頭にあったのは，柳田国男という人が戦後しばらく，成城学園を中心にして「社会科」という教科の教材作りに取り組んでいたということです。これを私はある雑誌を通して知っていたんです。それで，もし扱うのであれば，もうこの事をネタにするしかないなと考えました。今考えてみると，これはちょうど29歳の夏休みで，千葉大の講師になりたての頃でした。暑い時期に，クーラーのない，本当にあの大変な研究室に毎日通って，400字詰めと当時は言っていましたけど，その用紙でだいたい毎日17枚ぐらい書いていました。

それが実は柳田国男研究の端緒で，そこで私は大きな発見をしたのです。それは後に学位論文になるわけですが，ただ，その発見というのは，本当に単純な発見です。論文で言えば，たった１，２頁の部分を発見したに過ぎません。

それはどういうことかというと，戦後，柳田国男は社会科という教科に大変な興味を持ち，柳田社会科という教科書づくりまで行なった人ですが，その当時の社会科に対する考え方の原型が，彼の年齢で言うと，27～8歳，時代でいうと明治の30年過ぎくらいに形成されていたという事実です。柳田は，その頃農政学という学問を，いまで言う農村経済学みたいなものですね，これを学んでいました。そして，農政官僚になった時期に，いろいろな講演をしています。そのなかに，彼の社会科の原型とも見られる文章が見つかったんです。これは偶然でした。私の学位論文というのは，もうそれに尽きるんです。その１，２頁を発見しただけです。

ノーベル賞を貰った人がよくほんのちょっとしたことでノーベル賞を貰ったと言いますが，私の経験から，すごくそれに近いことを実感しています。

２．「社会科」教育の選択

次に，社会科教育の道になぜ入ったのかということをお話しします。私は別に社会科をやるつもりはありませんでした。ただ，東京教育大学の教育学科に入ったときに，梅根悟先生という先生に，実はクラス担任をしていただきました。初めは何と読むのか分からなかった。「バイコン」と読むのか。「ウメネ」という姓はあまりないんですよね。この先生は，教育学科に入ってみて，すごい人だということを，痛切に感じました。

この先生は，一年間担任をしてくれたのち，二年生になるときに和光大学が新設されて，その初代の学長として赴任されてしまいました。この梅根先生を中心とした，いわゆる新教育のムーヴメント，運動の拠点になっていたのが，東京教育大学の教育学科だったんですね。一方，東大の教育学部のほうは，どちらかというとそういう運動とは余り関係がなくて，戦前からの教育科学研究運動を引き継いできているので，どちらかというと左翼系の先生方が多かったです。教育大のほうは，どちらかというと文部省に近い学者が多かったと言えます。

ただ梅根先生は，コア・カリキュラム連盟とか，日本生活教育連盟とか，そういう民間教育団体のリーダーでもあったので，やや左翼的ではありましたが，やはり基本的には，子どもの

関心を中心に据え，子どもを中心とした主張をなさっていました。

そうした流れのなかで上田薫先生が教育大に来られたわけですが，私が上田先生の本を見つけたのは，いまは無くなってしまいましたけれども，池袋の新栄堂という本屋さんでした。昔は結構大きかったんですけれども，いまから見れば小さい本屋さんでした。その2階のフロアに上がったところに，なぜか分からない不思議な『知られざる教育』という名前の本が並んでいました。私は何だろうと思って，ふっと手に取り，ぱーっと見たら，何か面白そうだなと。私の勘が当たったんですね。それから，上田ファンになったんです。ちなみに「知られざる教育」とは上田先生たちがつくった「初期社会科」の理念と理論が正当な批判もなく歪められてきたという思いがつまった言葉です。

ですが，もともと私は教科教育をやるつもりは全くなくて，もともとは教育哲学をやりたかったんです。だから，千葉大のときは，いまだから言いますと，教育哲学会の常任理事を3年間務めました。ところがこの学会は会員が少なくて，2票くらい取ると理事になってしまう学会でした。当時は学会員が千葉県に3人か4人しかいなかったらしく，たまたま私が2票くらいとってしまったらしいのです。それで私は3年間，全然私の専門でもない教育哲学会の常任理事ということになりまして，かの大浦猛先生とか，長尾十三二先生とか怖い先生ばかりのなかに混じって，なぜか私だけ29～30歳くらいで常任理事になっていました。

ですから，教育哲学をやったわけではありませんけれど，私のなかで教育を考える基本は哲学なんです。フィロソフィーですね。ですから，いま社会科をやっていても，やはり根底は哲学だと思います。

問題解決学習というものを知ったことが，私にとってはすごく大きなことでした。その頃もやはりいろいろな教育界の流れがありましたが，簡単に言うと，問題解決学習か系統学習かという古典的な対立関係の時代でした。私には系統学習は絶対に駄目だったんですよ。なぜかというと，高等学校時代に教育を受けてきて，自分がそこで抱いた教育に対する根本的な疑念は「なぜ自分がやりたくもないことをやらされるのか」ということでした。それで私は教育学をやろうと考えました。こういう教育を絶対に変えてやろうと。故郷の松本というところは，そういう事大主義というか，足下が見えない人間たちの集まりなんですよ。松本の人は天下国家を論じるんだけれども，自前のことは全然できないというタイプが多いように今も思っています。それは，一つの教育風土だったように思います。将来自分はこういう教育を変えて行こうと思ったんですけれども，大したこともできないまま，裏街道を走ってきたという話です。

3．柳田国男研究のきっかけ

次に柳田国男を研究しようとした，そのきっかけについてお話しましょう。もともと私はドイツ教育を学んでいました。ではなぜドイツなのかというと，私の出た高校にはドイツ語のクラスがあったんですね。ドイツ語をやってみようと思って，ドイツ語を学び，大学はドイツ語で受験したんです。けっこう簡単だったろうと言われるけれども，そうでもないんですよ。ドイツ語は，私たちは2年間しか学んでいませんから。高校2年3年のみです。普通の人は英語を6年学んでから受験しますから。それと比べたらそんな易しくはなかったんですけれど，でもドイツ語好きだったので，ドイツに行こうという気持ちがあって，学部時代まではドイツのことを中心に勉強しました。それでは，なぜやめたのか。

恩師の梅根悟先生はドイツ教育学の大御所で，外国教育史とヨーロッパ教育史を専攻されたんですが，実は西ヨーロッパには一度も行ったことがないと言うんです。時代がそうなんでしょうけれども。私は4年生の時に半年余りドイツに行きました。そのときに私は，ドイツ教育学は出来ないと思いました。なぜ出来ないかと思ったかというと，キリスト教なんですね。どこへ行っても，キリスト教が分からない限り，ドイツの教育は分からない。実は私の生い立ちは

仏教ですので，別に仏教だからキリスト教が分からないわけではないと思うんだけれども，ただ，やはり私は仏教のほうが分かるんですね。神道も何となく分かるような気もするんだけれども，キリスト教は分からなかった。

なぜそのことが分かったのかというと，ドイツの小学校に通っていたからなんです。学部4年だから卒論も兼ねて，小学校の2年，3年，4年という子どもたちと一緒に学校に通っていました。そうしたらある2年生の女の子が，こう言うんです。もうドイツ語で何と言ったかは忘れたので日本語で言いますけれども，「私はね，悪いことしないの」と言うんですよ。それで「何で悪いことしないの？」と尋ねたら，「神様が見てくれているから」と答えたんです。これ聞いたときに私は，駄目だと思いましたね。私たちには，絶対そのような発想はないですから。私は神様が見ているから悪いことしないという風には考えることはないし，考えられません。たぶん神様がいてもいなくても，悪いことするだろうなと思います。そういう発想自体がないですから。でも，そういう発想の子どもたちに教育をするというのはどういうことだろうと考えたら，もう私には出来ませんでした。

ですが修士課程の修士論文まではドイツをやっていました。フィヒテです。『ドイツ国民に告ぐ』というあの有名な本を手がかりにしながらですけど，それを中心にして，ドイツの民族教育における Nation とか Volk とか，いわゆる民族教育に興味がありました。それは，やはり後の柳田国男研究にとつながっていくんです。いわゆるエスノロジーの民族とフォークロアの民俗は違うんだけれども，ただ，人々の文化という面においては非常に近いものがあって，ドイツの Nationalismus に基づく国家教育や国民教育というものに始まって，日本の村に残っている民俗の教育の芽というのは，私にとってはすごく新鮮でした。

当時の東京教育大学の教育学科の先生方はもうほとんどいらっしゃらないのですが，ゼミではほとんど外国語の文献を読んでいました。当時はまだ外国の文献に学ぶという姿勢が圧倒的でした。そのとき，私には秘かな疑問が生じていました。それは，「日本には教育がなかったのか」と。どうして日本の教育学の教授というのは，外国語の文献ばかり読むのだろう。それなら，日本に教育はなかったのか。そんなことはないんですよね。どんな村にも，どんな町にも，教育はあったし，戦前だけでなく，中世においても，近世においても，教育はあったわけですよ。しかし，それを研究する人はほとんど日本教育史の先生方ばかりで，これはどういうことなのだろうという思いは，すごくありました。

そこで先程言ったように，日本民俗学の創始者である柳田国男が戦後「柳田社会科」なる教科書作りを行っていたと知って，私は柳田国男について関心を深めていったという次第です。

日本の郷土とか，村の中に残っている教育というのを，例えば柳田国男の言葉を使って「常民教育」と言ったりしますけれども，私はそのなかで，いわゆる庶民の文化のなかにおける教育のあり方というものに関心がありました。それはもし一言で言うならば「児やらひ」という言葉に表現されるんだろうと思います。

「児やらひ」というのは，いまで言うと，躾とか子育てという意味です。今でも四国などでは，そういう言葉を使っているようです。「児やらひ」の「やらふ」というのは向こうへ送るという意味です。遣唐使の「遣」ですから，「児やらひ」は子どもを向こうへ送ることです。送るというのはどういうことかと言ったら，最近の言葉で言うと，「自立」なんですね。つまり，子どもたちを抱え込むのではなくて，本当に子どもたちの足で歩かせる。これが「児やらひ」という発想なんです。ですから，たぶん昔の多くの母親は「児やらひ」の思想を持っていたのではないかと思いますね。私が考える教育の本質は，例えるならば，あくまでも子どもたちが，ある意味では，一人で歩いていけるようにすることです。これがいかに難しいかということは，附属学校関係の仕事をすることによって，また随分と特別支援学校の先生方とお付き合いをするなかで感じてきました。

ここにいらっしゃる教育学の先生方は，特別

支援教育とか障害児教育とか，そういうのは別の学系があるのだと思っているかもしれせんけれども，そんなことはないんですね。教育の本質を考えるときに，やはり障害児の問題を考えることはすごく意味があるということです。例えば，私の家に自閉症の女の子がこの2，3年ずっと通って来ています。年に1回だけ来ているんです。妻が自閉症関係の仕事をしている関係で。このあいだ聞いた話はショックでした。その話をしましょう。

その子は私の家に来たときに，何を言うかと言うと，「誕生日はー？」としか言わないんですよ。「誕生日はー？」と言うだけです。「あなたの誕生日は」とも言わないんですよ。高校生になってもです。「誕生日はー？」と言うので私は「8月26日だよ」と言いました。すると彼女はたちどころに，たぶん10名20名の誕生日を全部覚えるんですよ。これはもう特殊な能力ですね。そして一回覚えたら，絶対に忘れない。会った一言目に彼女は聞くんです。「誕生日はー？，誕生日はー？」と。それは彼女のコミュニケーション・ツールなんですね。コミュニケーションの一つの重要なツールなんです。それら以外の言葉が発せられないということなんですね。ですから，私の妻とか会ったこともない息子二人の誕生日を全部覚えて，彼女は必ずその誕生日の当日にハッピーバースデイのカードを送ってくるんですよ。絶対に迷わないし，間違わない。一日も間違わないで，必ず来るんです。

彼女が2年生になって作業所に実習に行ったときに，一緒に行った友達とか，作業所の先生とか，いろんな方々に，誕生日を聞くわけですよ。そうして聞いた事をもとにして，彼女は一年間誕生日の葉書を送り続けるわけです。1回だけですよ，一人の人に対して。そして3年生でまた同じところに行こうとしたときに，その向こうの作業所から，養護学校の方に，10何通かの手紙が封を切らずに送られてきたという話です。たぶん年頃の男の子もいるので，変な誤解をされたら困るということもあったでしょうけれど，障害者の関係の人だったら，その子がどういうコミュニケーション・ツールを持っているかということぐらいは理解しなければならないでしょう。

それでその子は断られたために何と言うようになったかというと，「手紙書かない，手紙書かない」ということを覚えた。本人は知的な発達もあるから，どういうことなのか分かってないんですよ。一番悲しいのはお母さんですね。お母さんが一番悲しい。それで私はそういう話をあっちこっちで少ししたものだから，お母さんはとても喜んでくれて，「ああ，そういうふうに言っていただけるだけでも十分です」と言っていますが，たぶんその子は，今後手紙を書かないようにするんですよ。そうしたら，彼女の社会参加はどうなるんですか。障害児教育の先生方はよく「社会参加」と言うんですよ。でも，その子にとっての自立，このいまの「誕生日はー？」という言葉をもう言えなくなってしまったら，彼女はどこで生きていけばいいんですか。

それからもう一つ，少年院の先生が私に話してくれたエピソードです。少年院にいる男の子が，中学校を卒業することになった。卒業式に渡されるはずの卒業証書は，在籍校から少年院に持ってくる。ところがそのときに少年院に送られてきたその卒業証書は，4つ折になっていたというんです。4つに折られて送られてきたというんです。たぶん担任の先生も，学校の先生方ね，その子に随分苦しめられていたのかもしれない。それは分かりません。事情があるかもしれない。

私は一番言いたいのは，その少年院の先生が，その4つ折りの卒業証書にアイロンをかけて渡したという話です。言ってみれば，いまの日本では，子どもたちを本当に自立させる仕組みが出来ているのか。もっと言うならば，そもそも教育学者にそういう問題に答えられる術があるのか，ということを私は問いたいですね。そういう思いで言ったときに，今日はペスタロッチ祭ですから，ペスタロッチとかモンテッソーリとかいろいろ研究するのはいいんだけれど，本当にペスタロッチを研究するということはどういうことなのか。ペスタロッチは子どもたちを本当に自立させるために苦闘をした人じゃない

ですか。それを私たちがどのように成し遂げるかという，そこを抜きに教育学研究をしても，大した意味はないなというのが私の遺言の一つです。

柳田国男とはずいぶん世界の違う話のようですが，教育の本質を「自立」と考えれば，「児やらひ」の思想は，多くの示唆を与えてくれます。

4．「地名」の発見

地名研究は，明治図書の『文明と伝統の授業』を執筆をした，そのあたりから始まりました。地名の本をなぜ書いてきたかというと，千葉大時代に社会科の教材開発として，授業づくりの内容として地名をやってみようかな，という思いがあったことでした。私は10年単位ぐらいで１つの教材づくり，教材開発をしてきたんですけれど，最初に取り組んだのが地名でした。まず地名の教材化というのをやりました。次が筑波大にきてからの10年間は食べ物，食べることをテーマに取り組みました。それからそのあとは，中途半端に終わってしまいましたけど，マンガの教材化というのをやりました。この３つが私が取り組んできた教材開発の主なものです。

これは当時の「授業づくり」の走りのようなものでした。簡単に言うと，千葉大時代に，社会科教育法のような授業を持ちました。その授業を初めてやったときに分かったのは，具体的な実践例がないと駄目だということだったんです。具体的な実践例といっても，私には実践がありません。それで人の実践を持ってくるんだけれど，人の実践はなかなか使いこなせない。だったら自分でやってみるよという話です。それで演習を新たに設置して，その演習で一年間かけて授業づくりをし，その実践の成果を講義で使おうと考えたわけです。もちろん，自分自身も子どもたちを目の前に授業をしました。このシステム，考え方を取り入れたのは比較的早かったと思いますよ，当時としては。いまはもう当たり前になってきていますけど。もうかれこれ30年くらい前の話ですから。ゼミで開発したものを講義で使おうという発想です。

やがて韓国との連携で，日韓交流授業というのをやっていくんですけど，あれはまったく同じ発想でやっているんです。別に日本でもよかったんですけれど，あれはたまたま場所が韓国だったというだけのことです。日本では当時，私がここに来たばかりの1986年に，授業やらせてくれる学校がありませんでした。当時，高等学校は本当に閉鎖的でした。だから高等学校の先生は授業を見る機会もないし，本人も見られることもないから，本当に授業が下手です。ちょっと言い過ぎかもしれませんが。子どもが何を思おうが別に構わないという感じでやっていた人が多かった。その後，うちの卒業生がたくさん現場に出ていって，だいぶ変わってきたように私は思います。

千葉大の社会科教室に清水馨八郎という地理学の先生がおられました。その先生がまだ私が29歳か30歳の頃，教授会の前に立ち話程度に「谷川先生，東京というのは地名や町名で地形がわかるんだよ。下町には橋に関する地名が多いし，山の手には山とか岡という地名があるし，それをつなぐ坂という地名もあるんだよ」と話してくれました。たった20秒程度の話です。それは東京にずっと住んでいましたから分かりますよね。例えば，下町の方は日本橋，浅草橋とか，新橋とか橋の名前が多いですから。当然，海とか川とか，水路があったから橋が多いわけですよ。山の方は，白山とか大岡山とか，いろいろあって。その中間のところにあるのが坂なんですね。神楽坂とか赤坂とか。「八百八坂」というくらいだから，とりあえず千ぐらいの，いまでも千ぐらいの名前が残っている坂があるんですね。

その話を聞いたとき，ふと気づいたのが，私が小学校高学年の頃に，地理大好き少年，あるいは地図大好き少年だったことです。地理じゃない，地図ですね。地図が好きだったんですね，マップがね。理由はわかりません。

あえて言うならば，私の故郷の長野県が山に囲まれていたということかな，と推測しています。山はよく見ると，棒グラフでもあり折れ線グラフでもあるんですよ。山の尾根を見ていると，こっちの山が高いか低いかということ，高

い低いをいつも気にしているのが信州人なんです。もちろん高い方が好きなんです，信州人というのは。だから成績でも上の方が良いに決まっているんです，下よりも。高い所に登れば，周りが全部見渡せますので，それはまあ良いかもしれませんよね。それで，私なんかもだいたい上昇志向。足元を見ないんです。それで身の程知らずに天下国家を論じるという，これは信州人の悪い癖です。しかもとくに松本はひどいですね。私の住んでいた松本盆地というのは，最低の標高が605メートルです。つまり605メートル以下は，私は18歳の頃までほとんど知らずに生活してきたということになります。だから，東京タワー２つを上げたぐらい，それより下の空気は吸ったことがないんです，私は。18歳まで。空しか見えないですから。そういうことを考えると，グラフが好きなのは，折れ線とか棒グラフとか，高い方が絶対いいんだという，そういう単純な発想だったんですね。

５．谷川健一（1921～　）との邂逅

年齢で言うと30歳ぐらいから地名のことをはじめて，それを社会科の授業演習でやってきたんですけれども，たまたま谷川健一先生という方と出会うんです。私の人生のなかで一番大事なのは妻ですけど，あえて言っておきますが，ただそれぐらいの大きな出会いでした。外部の方としては，上田薫先生と谷川健一先生，そして後でお話しする矢口高雄先生，この３人だと思うんですね。谷川健一先生は，実は1921年生まれですので，私より24歳年上，同じ酉年です。この先生が，1981年の４月17～18日に，これが運命的な出会いなんですが，「地名を通して『地方の時代』を考える全国シンポジウム」というのを川崎市で開催したんです。このときに私は，行きのバスで当時筑波大に赴任したばかりの民俗学者の宮田登さんと，たまたまバスで一緒になった。それも運命の出会いだったんですけれど，私が千葉大から筑波に来たら，偶然に第二学群の事務で宮田先生とばったり会って，「え，あんた来たのか」と言うから，「はい，来ました」と言ったら，「ああ，みんな集まってくるんだな」というふうに言っていましたけれども，結局宮田先生はその後亡くなってしまいました。

この谷川健一先生という方に私が非常に興味を持ったのは，地名というたとえようもなく小さいものに最大の文化的価値を見出していたからです。地名というと，そんなのどうでもいいじゃないかというものなのかもしれませんが，それをこのシンポジウムでは，文学，歴史学，民俗学，地理学，経済学，あらゆるジャンルの学者たちがこの「地名」一点で集まってきたのです。地名だけでこれほど人が集まってくるのかという，当時の，いうなれば文化の饗宴のような感じがしました。その後，川崎市に地名研究所を作るということになり，それで私に声が掛ったんです。私は地名を教育に生かそうということをやっていたんですが，たまたまはじめたばかりでした。

ある晩の10時頃，谷川健一先生から家に電話がかかってきたんですよ。「谷川先生」，この先生は「たにがわ」ですから。私は「たにかわ」です。だから，親子だと思われていましたが親子じゃありません，もちろん。で，この24歳年上の大先生が，「谷川先生」と私を先生呼ばわりしていただいたんですね。どうゆうことなんだと驚いたわけですが，結局「地名研究所を手伝ってくれ」という話になりました。神様のような方ですから，「わかりました，さっそく行きます」と言って，それから川崎に通うことになったんです。地名研究でいうと，明治時代に吉田東伍という人がいて，わが国の地名研究の先駆者です。そのあと，柳田国男，谷川健一と続くこの流れというのは，実に，日本の近代の学問の位置のなかでは，とても重要な役割を果たしてきたと言えます。

これらの一流の先生方に接するなかで，教育学者にかなり強い疑問を持つようになりました。というのは，この方たちを見ていると，例えば谷川先生がそうですが，古代史と地名の研究をずっと，何十年も続けている。そうか，学問というのはそういうものなんだなと，すごく感じさせられたんですね。とくに私たちのように，教科教育とか学校教育に近いところでやってい

る学者は，その時々の状況に合わせて，ものを変えていく人が多いんです。私の友人でもいるんですけど，構造化が出たときは構造化の本を書いて，現代化が出たら現代化の本を書いて，総合が始まったら総合の本を書いて，免許更新制がはじまったら免許更新制の本を書く。おかしいですよこれは，どう考えても。教育学者について一番おかしいと思うのは，指導要録が変わったら学力観が変わるというのはどういうことなのか，ということです。つまり指導要録では，学力が唱えられるじゃないですか。それは文科省が作るんですよ，10年に一回。教育学者がそれを追っていくだけだったら，あなたは何をやっているのという話なんです。どんなことを言っても，次の指導要領が変わったら，言うことが変わっているんですから。そういう教育学というのはおかしいのではないかというふうに，この方たちと付き合って，痛感しました。

6．学位論文について

学位論文のことですけど，これは本当に大変でした。私が年齢的には48歳くらいの頃ですから，本当にきつかったのですが，世の中，学位を取らなければいけないという，そういう状況でした。それまで，アメリカに通っていた頃は，学位が無いということに対して，どう考えたら良いのか，ものすごく悩んでいました。あの頃は，別に学位は無くても通用するという一般的な観念が支配していたのですが，私は自分がやらなければと決断しました。自分が取らなければ，後進の人たちにも学位を出すことができなくなる，という強い意識でした。

学位論文を書くには，「決断」と「集中」が必要になります。その当時，私は表の世界で生きていましたから。表の世界というのはどういう世界かというと，それは世間からお声がかかるという世界です。ですから，大学には半分もいなかったと思いますね。一番多く使った駅は，浜松町の駅でした。浜松町から羽田に向かう路線を一番多く使っていました。それほど全国を駆け回っていたんです。そういう人間が，１年，２年の間仕事を抑えるということは実は大変なことでした。

私はすべてを捨てようとは思いませんでした。３つだけ残そうと思いました。１つは当時やっていたＮＨＫの仕事です。ＮＨＫの仕事はマスコミの関係もあるから，これは残そうと。それから，東京書籍も残しました。教科書の仕事も外せませんでした。もう一つは，私が作った「連続セミナー 授業を創る」という研究会です。この３つは仕方がない。あとは全部切りました。講演もすべて。それで一年半くらい集中して書いたのですが，これはやはり辛かったですね。今まで学位論文というものを書くという訓練を受けていなかったからです。しかも，適当に書いているわけです，みんな。それをまとめて，書き下ろしにしていくというのは，年齢も考えたら大変なことでした。私の記憶に鮮烈に残っているのは，千葉市に帰って，妻と夕食を食べようと思ったときに，中華料理屋で，一口も食べられなかった時のことです。それほど追い詰められていました。でも追い詰められるっていうのは意味があったと思いますよ。ものが食えないということは，かつて私は一度もありませんでした。だけどそのときは本当に食べられなかったんです，ストレスで。ストレスというよりも，何か追い込められていたという感じです。でも，それをやった人とやらない人では随分違います。

私が裏舞台に行かざるをえなくなったのは，実はこの学位論文だったんです。三一書房で学位論文を本にまとめました。1996年のことです。８月に出したんですけれど，そのときに三一書房を紹介してくれたのは，谷川健一先生でした。そのときに，校正を見て，「あ，今まで自分は間違っていた」と痛感しました。今まで私が書いていた本の主なものはお手元の資料に書いてあります。こういう本を書いてはいけないんだということです。私の1996年以前の本のなかにも，もちろん良いものもあります。例えば『社会科理論の批判と創造』。社会科教育においては，自分で言うのも変ですが，この本を超えるものは，あまり見たことないですね。しかも，これを32歳頃に書いたわけですから。だから，良いもの

はやはり若いときしか書けないんだなという感じがしますね。

話を戻します。学位論文をまとめた『柳田國男　教育論の継承と発展』，この出版社は三一書房だったのですが，この本を作る際に校正者にお会いして，強烈なショックを受けました。それは私の原稿にある「平凡社」という表記に関してでした。

この「平凡社」というのは×で，新しい校正に赤が入れてあったんです。普通「平凡社」という字を見て，何にも変だとは思わないでしょう。この「平凡社」の文字。ところが，そこには赤が入っていたんです。平凡社の「平」というのは，実はこの２本の横棒はいいんですけど，真ん中が，下にこうなっているのではなくて，両側に出るんです。これが平凡社の正式な「平」なんです。それを見たときは，もう目から鱗なんてものではなく，衝撃でしたね。ああそうか，本というのはここまでやるんだという感じでした。「平」だって別にいいんですよ，いま新聞を見たらみんなこの字になっているんですよ。平凡社の広告は別として。この校正者は，誰かというと，東大の安田講堂に籠って，刑務所から本を出版した人です。その人の校正はパーフェクトでした。これでやはり，私の人生が変わりました。

７．「生活科」へのかかわり

生活科に関わって何をやったのかという話です。いまからもう20年くらい前に，社会科解体というのがあって，高等学校の社会科が，地理歴史科と公民科に再編されました。それから，小学校低学年の社会科と理科が廃止されて「生活科」に変わりました。これは戦後最初の新教科新設であり，当然のことながら，賛否両論あり，議論も戦わされました。「社会科」と「生活科」のかかわりは微妙ですが，これについて細かく触れるだけの時間がありませんので，省略します。

ただ，この生活科との関連でマンガ家の矢口高雄先生との出会ったことが私の運命を変えたと言っても過言ではありません。1991年12月に生活科のイベントを東京で行いました。そのときどなたかに記念講演をお願いしようということになりました。ある人が『ボクの学校は山と川』という本を書いているマンガ家の矢口高雄さんの名前を教えてくれました。『釣りキチ三平』は私の子どもが愛読していたのでよく知っていました。『ボクの学校は山と川』は矢口さんの小中学校の生活経験や体験をエッセイとして書いたものですが，その本を読んで，まさにこれは生活科の本だと思いました。私のマンガとのつきあいははまさにこの矢口高雄先生との出会いから始まったのです。

実はこの３月20日に『釣りキチ三平』の映画が封切りされます。ぜひ見ていただきたいと思います。その試写会に呼ばれて行ってきました。須賀健太という，『Always　三丁目の夕日』という，あの少年だった男の子がいま中２の生徒になっていて，その子が三平を演じるんです。そのときに，三平役の須賀くんのインタビューの記事がありまして，「君は知っていましたか，釣りキチ三平を」という質問に，「いや，知らなかったんですけど，あの絵を見たら，実は，学校で習った教科書に載っていた絵だってわかった」と答えています。これ実は，東京書籍の小学校社会科の教科書に釣りキチ三平の絵を入れたのは私だったんですね。彼はその絵を見て，あ，この絵だ，釣りキチ三平だって分かったらしいんです。

そういう関係でマンガジャパンというところに入って，様々な活動をするようになりました。マンガジャパンという組織は石ノ森章太郎を中心にしたストーリーマンガ家の集団です。この組織で私は多くのマンガ家と接し，教育界とは全く異質な世界で多くの経験をすることになりました。その成果は宮城県の石巻市につくった「萬画館」などとして結実しています。

８．教育学研究への問い

これから教育学研究を展開されようとする皆さんに，教育学研究の問いを伝えたいと思います。

１つ目は研究者の「良識」にかかわる問題で

す。とくに現場に近い研究をしている私たちに関して，私はやはりおかしいなと思ったところがありました。明治図書という大手の出版社で，私が本当にお世話になった出版社ですけど，法則化運動が始まった頃に，私はちょうど自分の研究会を立ち上げていました。その頃，一番私がおかしいと思ったのは，編集者に迎合する研究者の体質です。つまり，編集者に合わせないと，雑誌等に原稿を書かせてもらえないというのがあるんですね。これは私の目には許せないと映ったのです。

当時の多くの人々はそれに気づいていました。本当は法則化については賛成してないんだけれども，それを書くと，明治図書から原稿依頼がこなくなる。だから，多少迎合しても物を書くようになる。当時の教育学者にはそういう人たちが結構いました。これは違う！と私は痛感しました。学者ともあろう者が，教育書の出版社の編集者ごときに媚を売るようになったらおしまいだと。

私の恩師の上田薫先生は，随分いろんなことを考えていたけれど，結局上田先生は，明治図書と別れるということはしませんでした。私はもう，自分しかいないと思いました。そこで，私が主宰していた「連続セミナー 授業を創る」の機関誌『パートⅡ』（第39号）で「拝啓　樋口編集長殿」という文章を書きました。1997年２月のことです。世間では明治図書と喧嘩別れをしたと言っていますけど，これはとんでもない間違いでして，私の「卒業宣言」でした。つまり，本当にお世話になりました，という。実際，私の本を見てもらうと，明治図書すごく多いです。最初の頃はほとんど明治図書なんです。明治図書に，一人前の研究者として育てられたことに対して，本当に私は心から感謝している。だけど，いま自分が本当にやりたいことは，明治図書ではできない。だから，卒業させてくださいという言葉で書いたんですけどね。ただ，いま読んでみると結構きつい言葉もありましたね。それはまあしょうがないと思うんだけど，でも，一人くらいね，こういうことにノーと言えるような研究者がいないとまずいと思いました。

それから，私は学位論文を書いてから５～６年間，教育書コーナーにほとんど行きませんでした。数年間。もう，行けなかった。もう行きたくなかったんです。ですから，もちろん教育書も書きたくなかった。こういうものは書いてはいけないと思っていました。でも行くようになったのは，附属学校教育局の教育長になってからです。教育書というコーナーに行かなければならないこともでてきて。そんな状況でしたから，それ以降教育書的なものはほとんど書いてないですね。

２番目は「長老支配を排す」ということです，学会もそうですし，いろんな地域の研究会もそうですが，長老支配が日本の教育を閉鎖的に追い込んでいる。例えば長野県には，信濃教育会というのがあります。いまはどうなったのか知りませんけども，その当時は，会長は90何歳の方で，とにかくその人が一言言ったら，絶対に従わなくてはならない。そういうところで長野県の教育が絶対に良くなるわけがない。そういうことをすごく感じました。

３つ目は「同属意識を排す」ということです。同じ考えの人だけが集まって研究会を組織しているというのは良くない。いろんな人を入れ込むようなものでなくてはならないと思います。もともと社会科は異質な人々で「社会」を構成するために生まれたものなのに，今もって同じ考えの人で研究会を組織している。これなぞはむしろ社会科の思想に反するものだと思います。

４つ目は「教育現実に正対する」ということですが，これについてはもう述べたので割愛させていただきます。

９．「顔の見えない友人たちへ」

さて，「顔の見えない友人たちへ」ということなんですが，皆さんもこのタイトルに一番興味があることと思います。実を言うと，私の経歴のなかに，１年間だけ遅れている時期があります。それはドイツから帰ってきて，４年生から修士課程に入るときです。１年遅れた理由は何かというと，このまま教育界にいくのか，ドイ

ツ文学にいくのかという迷いがあったからです。コンパのとき当時クラス担任をしていた馬場四郎先生に「先生どうしましょうか」と相談すると，先生は「一度決めたことをやれ」と言われて，「わかりました」と言って，それで東京教育大の文学部のドイツ文学と東大の文学部のドイツ文学を受けまして，見事落ちました。それで，目が覚めたのかどうか知りませんけど，翌年，教育大の方に戻って，大学院に入りました。それからずっと教育をやってきたわけですが，どこかに文学に対する思いは捨て切れずにいました。やはり正直に言って大学の教授の生活はもういいかなと。いまやらないと次の仕事ができないということです。いまやりたいのは，いろんな本を書くことです。

例えば，日本の地名のシリーズはもっと書きたいと思います。それから，先ほど平山先生の講演にもあったようですけれども，PISA型学力は私は誤訳だと思っています。そこで，『「誤訳」された日本の学力』という本を書きたい。これは教育書でなくて一般書としてです。それから，『幕末武士がつくった近代の学校』，これは教育史の問題かもしれませんけど，日本の中等教育というのは武士が創ったのだという大きな仮説があります。その後を追ってみたい。それからもう一つは津田仙という人物ですけど，津田仙は，津田梅子のお父さんで，この人は実はうちの附属学校，盲学校，聾学校をつくった先駆者です。佐倉藩の藩士だった人です。明六社に入って，農業関係の仕事に携わることになるんですけど，盲学校，聾学校の先駆者でもあるんですね。

以上のようなことを考えたときに，実を言うと，私の結論は，いままでの教育の世界は，「顔の見える教え子」を相手にしていたということです。今日は教え子が結構来ていただいていますけれど，それは顔の見える教え子です。私はこれから「顔の見えない友人たち」を対象にしてものを書くしかないかなと思っています。ものを書くというのは，顔が見えない読者を想定して書くということです。これが「顔の見えない友人たちへ」という意味です。

ということで，たぶん教育学者として話をするのは今日が最後だと思いますけれど，また，いろいろな形でお目にかかることもあると思います。そのときは，教育学者ではなく，ひとりの人間として，あるいは市民として，何を考えて何を発信していこうとしているのか，またアドバイスいただければありがたいと思います。筑波大学には，24年という本当に長い間お世話になりました。心から御礼申し上げます。ありがとうございました。

（2009年３月13日）